

平成28年4月号

一宮の歴史特集

「一宮町ゆかりの人々」
①加納久宜(二八四八〜一九一九)

今月から、「一宮の歴史特集」と題し、一宮町にゆかりのある人物や文化財を紹介していきます。第1回は町の礎を築いた加納久宜について紹介します。

加納久宜は嘉永元年(1848)

に今の福岡県にあった三池藩の藩主の弟の子として生まれました。7歳の時、江戸(今の東京)の屋敷にいたところ、地震(安政の大地震)にあい、両親を亡くしてしまいました。そしてその後、上総一宮藩主・加納久恒の養子となり、19歳で一宮藩主となりました。その年、大政奉還が行われ、明治時代に入ったため最後の一宮藩主となったのです。

久宜はその後、新潟学校長などを歴任し、明治27年(1894)に鹿児島県知事になりました。6年7ヶ月の県知事時代に、久宜は農業や教育などに対して積極的な政策を進め、西南戦争で混乱していた鹿児島を近代化に導いたのです。

知事を辞めた後、入新井信用組合

平成28年5月号

一宮の歴史特集

「一宮町の文化財」
①一宮城址

本コラムでは、「一宮町ゆかりの人々」と交互に「一宮町の文化財」を紹介していきます。今回は「一宮城址」(町指定史跡)を紹介します。

一宮城址は天然の地形を利用した標高約30mの台地上にあった山城(通称「城山」)でした。現在の振武館周辺で、玉前神社、観明寺のあたりまで城域だったと思われる。今でも「城之内」「陣屋」などといった城に関する地名が残っています。

築城の時期や城主はわからないことが多く、ほとんどが謎に包まれています。戦国時代の1560年代前後には安房里見氏の家臣である正木氏(勝浦や大多喜を支配した正木氏の一族)がいたことが知られています。

天正18年(1590年)の豊臣秀吉の小田原城攻めの際、一宮城主として「鶴見甲斐守」という人物がみえますが、この人物も里見氏の家臣であったらうということ以外、詳しいことはわかっていません。この合戦の後、関東には徳川家康が入り、一宮は家康家臣の本多忠勝(大

多喜10万石)の支配下に入り、城は廃城になったと考えられます。

現在、当時の面影を残すものはほとんど残っていません。昭和59年(1984年)の振武館建設時の発掘調査で出土したものが当時の様子を伝えるだけです(現在これらの出土遺物は「一宮城出土遺物」として町の指定文化財になっています)。

近年の研究成果から、一宮は水陸交通の要衝にあつたこと、湊があつた可能性が指摘されています。そのような点から一宮城は上総国において重要な拠点だったと考えられます。謎の多い一宮城ですが、戦乱の最前線として戦国時代を乗り越えてきたのです。



▲写真：一宮町教育委員会所蔵

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416



▲現在の一宮城址
(※大手門は史実に基いて作られたものではありません)

★詳しいことは「中世の一宮」(一宮町教育委員会、2004年)を一覧ください。

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416